

平成 29 年度 学内研究助成金 研究報告書

研 究 種 目	<input checked="" type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21 世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 21 世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研 究 課 題 名	植民地期インドの商家建築壁画にみる近代性と民族主義の形成過程	
研究者所属・氏名	研究代表者： 豊山 亜希 共同研究者：	

1. 研究目的・内容

本研究の目的は、イギリス統治下にあった 19 世紀から 20 世紀前半のインドおよび東南アジアにおいて、経済的に成功した商業カースト集団によって造営された邸宅建築の様式的変容から、現代にいたるインドの都市空間や美意識が形成されていく過程を読み解くことである。研究対象として、構造上最も大きな面積を占め、施主が他者に対して最も強くアイデンティティを主張する場所として機能した壁面に施された彩色画に着目し、その主題・材料・技術の変化を記録・分析することを具体的な研究内容として設定した。

2. 研究経過及び成果

研究を推進するうえで、1 年間の研究計画を設定・実行し、成果を公表したので、時系列で以下にその経過を述べる。

4 月～7 月の研究計画は、前年度までに推進・蓄積した商家建築の記録を整理するとともに、この段階までで調査を十分に実施していない、あるいは補完調査が必要な建造物を選定し、調査依頼を行うこととした。前年度まででインド国内の主要な商家建築の調査は実施したが、施主の商業ネットワークとして重要な位置を占める東南アジアの主要港市にもインド系移住商人（印僑）の商家建築、いわゆる「印僑建築」が現存している可能性が資料調査から判明した。とりわけ、ミャンマーは、長い軍政下で文化研究の停滞期が長かったため、研究蓄積がない一方で、開発が進行していないため古い建造物が解体されずに現存している可能性が資料から推測されたため、首都ヤンゴンとイギリス統治期の旧首都モーラマインを本研究の調査対象にすることを決定した。ミャンマーにおけるフィールド調査に加えて、英領ビルマの関係文書をイギリスの大英図書館で予備調査する必要性も鑑み、夏季調査としてイギリスの文献調査、春季調査としてミャンマーの現地調査を行うことに決定した。

上記の研究経過を受けて、8 月下旬から 9 月上旬にかけてイギリス・ロンドンの大英図書館において、イギリス統治下のビルマ（現ミャンマー）の商務関係文書を調査した。その結果、主に英領ビルマで活動していた印僑は、南部タミル地方出身のヒンドゥー教徒、東部ベンガル地方および北部パンジャブ地方出身のムスリムに分類され、居住地域が異なることが判明し、その事実を確認できる 20 世紀初頭当時のラングーン（現ヤンゴン）の街区地図も入手した。これを手がかりとして、冬季のフィールド調査の実施計画を策定し、2 月下旬から 3 月下旬にかけてミャンマーへ渡航し、前述したヤンゴン、モーラマインに加えて、イギリス統治前から王朝首都として印僑が多数居住していたとされるマンダレーを対象に、邸宅建築および宗教建造物を訪問し、立地・建築様式・使用建材・装飾様式の記録作業とマッピング作業を行った。その結果、ミャンマーの印僑建築は、当地で産するチーク材を富の象徴として使用する、ビルマ建築の様式的影響を強く受けていると同時に、20 世紀前半に入り、日本の影響力が強化されていく過程で、日本製の建材が多数使用されるようになることも判明した。施主の商人は本国インドの故郷にも建造物を多数寄進しており、チーク材の使用などは明らかにビルマ建築からインド建築への影響とみて間違いはない。このように、1 年間の研究期間、これまで研究蓄積のなかったミャンマーを「植民地インド」という広い射程で考察することにより、植民者を必ずしも介在させないアジア域内のネットワークが存在したことを、実態として解明することができた。

3. 本研究と関連した今後の研究計画

1年間の本研究においては、これまで研究が進んでいなかったミャンマーの近代建築について基礎資料を整備する機会にもなった。同様の状況は、宗教を積極的に国家が支援しない、南アジア系マイノリティの宗教が軽視されている、といった形で東南アジア各国にみられる共通課題である。研究代表者が把握する限りで、ベトナム南部のメコン川流域がフランス統治下で開発された背景にも、やはりインド系移民の存在があり、その痕跡はホーチミンやミトーといった河口の港市に点在するヒンドゥー教寺院の存在からも明らかである。今後は、インド本国の商家建築の分析を進めつつ、より大きなアジアというネットワークを基盤として、印僑がどのような社会構造を構築し、アイデンティティをいかに形成したのかを、視覚文化の切り口を通して明らかにしていく予定である。また、2年以内に英文書籍として研究成果を刊行する準備を現在進めている。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)
Historians' Workshop	口頭	2017年9月24日
Political Economy Tokyo Seminar	口頭	2017年9月25日
Tokyo Humanities Cafe	口頭	2018年1月29日
Association for Asian Studies	口頭	2018年3月24日
INDAS-South Asia 研究拠点	口頭	2018年5月28日
AAS-in-Asia	口頭	2018年7月7日(予定)
『インド文化事典』	著書	2018年1月
<i>History of Consumer Culture Conference</i>	雑誌	2018年3月
International Journal of South Asian Studies	雑誌	2018年7月(予定)